

が、一部の灌漑地を除き、ほとんど自然のままの農業であるように、タイ国の農村もまた、ほとんど自然のままの農業であるように思われる。ただ、同じく自然のままといっても、前者では雨水が乏しいという条件であるのにたいして、後者では逆に雨水が多すぎるといふ条件のちがいはあるが、そのために、どちらも、きわめて不安定な農業である。

このような農業を安定させるために、乾燥地帯においては、上述のように、いろいろの方法で、古くから灌漑施設が発達した。いっぽう、湿潤地帯においては、逆に、排水施設を発達させることによって、その農業を安定させることができるであろう。その典型ともいふべき実例は、現在の日本で認めることができる。(私は、今度の旅行で、日本の農業がいかに安定しており、いかに発達しているかを、改めて反省せしめられた。)しかし、現在のタイ国では、このような排水施設は、まだ、ほとんど発達していない。

このことから考えられることは、水の乏しい自然を統制することの方が、水の多すぎる自然を統制するよりも、はるかに容易だということである。水が多すぎるにせよ、少なすぎるのにせよ、最も幼稚な農業技術にとっては、このような自然の極限状況が最も適合しているが故に、最初の農業は、おそらく、このような自然状況のもとで成立したものであろう。しかるに、水の乏しい自然状況においては、いちはやく古代国家が成立したけれども、水の多すぎる自然状況においては、なかなか、そのような古代国家の成立をみるのがなかった。それには、もちろん、いろいろの事情が複合しているであろうけれども、根底的に、上のような事情(自然統制の難易ということ)があるのではないか。

古代国家成立以後の農業の発展過程についても、私は一つの考えをもっているけれども、それはすでに現地通信という本稿の範囲を逸脱することにもなり、また、他の機会にその概略を述べてもおいた<sup>1)</sup>ので、ここでは省略することにしたい。

(1) 飯沼、「古典時代と旱地農法」『歴史学研究』(1966年1月号)；「世界農業史上における古代旱地農法の位置」『今西錦司博士還暦記念論文集』第3巻『人間』(1966年)

## ジャワ島・バリ島の調査旅行から

山口 真 一

### 1

私のこのたびの旅行は、火山性の地すべりの調査というよりは、地すべりを探して歩いたといったほうが当たっているかも知れない。日本において地すべりの多発地帯といえば地質構造線に沿って生ずるいわゆる破碎帯型、火山温泉のそばに生ずる火山性地すべり、裏日本や長崎県の第三紀層型というように地盤の方から素因として分類されている。

ところが東南アジアでは北イタリアからネパールを通過してジャワ島に達するチェシス構造線が走り、日本、台湾を通過して環太平洋構造線がフィリピンに達して居り、それぞれの構造線に沿って活発な火山が並んでいる。日本のように、雪国であって、その融雪水がじつとりと地面をうるおして生ずる裏日本の第三紀層型地すべりはあり得ないにしても、長崎県の北松型三紀層地すべりがあるかも知れないし、ましてや構造的な地すべり、火山温泉性の地すべりは頻発してよいはずであるが、まったくニュースになってあらわれてこない。北イタリアのバイオントダム近傍の大地すべり、ネパールの大地すべりはあるが、東南アジアの地すべりによる大被害はちっとも伝わってこない。東部ジャワのケルード火山爆発による災害も、火口湖の水がまぎった土石流型であって、日本の箱根の早雲山地すべり、福島県磐梯山に生じた大地すべりとは趣を異にしているようである。一体この地域の地すべりはどうなっているのだろうか。若しあったらどういう型の地すべりが存在するのであろうか、ないとしたならばなぜであらうか。それらのことを知り得たならばむしろそれが日本の地すべりの真の原因を解明する手がかりとなるかも知れない。そのような点に狙いをつけ、日本ならば起り易いに相違ない火山、温泉にまず目をつけ、そのあたり一帯の調査をして全体調査計画の予備

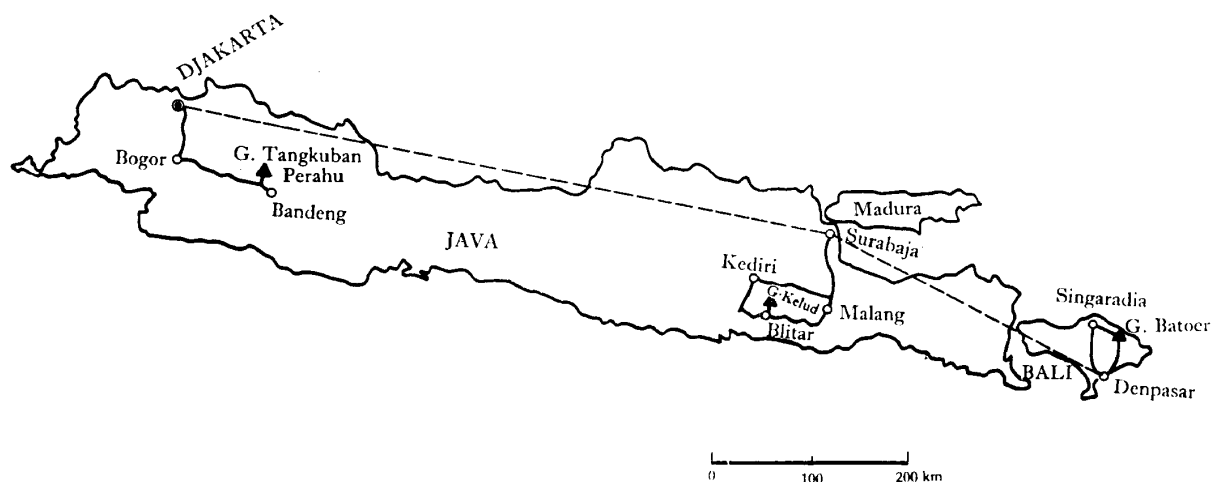


図1 予備調査行程図

調査とした。

インドネシア滞在の期間は1966年7月13日より24日までの僅か12日間であった。全体計画は数カ年を予定しているので、仕事がすべて終わってからもっと資料を集め整理し、報告した方が良いのかも知れない。けれども現地の事情は非常に流動し、交通公社の案内とは非常な違いを示しているところも少なくないのでとりあえず、小学生の修学旅行の日記のような形でも少しはお役に立つかも知れぬと思い筆を取ったわけである。

## 2

7月13日、今日はいよいよ、インフレに悩み共産党員大量虐殺の後もなまなましいインドネシアに入る日である。未知の世界に飛び込む感激と恐れが胸を締めつける。恐らく人々の気持は荒み殺伐としているに相違ない。それにしても先ず徹底的な検査とか買収とかで、悪名高い税関も通らねばならない。外貨申告書で持ち金全部申告したならば、闇と公定の谷間にはまり込んで一瞬にして貧しい旅人になってしまうかも知れない。ファイトを燃やして冷静に難局を突破するよりほかに手はない。9時30分、バンコック滞在中ずっと宿泊して顔馴染もできたプリンセス・ホテルの勘定をすませ、京大連絡事務所に転がり込む。ガルーダ航空の出発は3時55分であるから時間はたっぷりある。スタミナを作るため、町の見物にも出かけずひっそりと部屋で読書させて頂く。

1時間前に空港につき受付を済ませる。ここでは荷

物の重量ばかりでなく体重まではからさせられたのに はびっくりする。私がふとり過ぎているから特別なのだと読者は思われるかも知れないが、どんなスマートな妙齡の女性でも同じく計量されていた。

香港よりの飛行機は到着が一時間遅れた。いろいろな気持で同乗するはずの人々を眺め、インドネシアの生活を想像する。冷房の効いた空港で一時間、それもちゃんと遅れの時間を予め知らされて、これでいらするなど全くぜいたく極まりないことが、あとのインドネシア旅行でいやという程思い知らされた。

バンコックは晴、ジャカルタも晴であったはずだが、飛行機は厚い雲の上を飛び、マレー半島も海も何も見えない。ガルーダ航空はシンガポールに寄らないので機中の3時間、あれを思い、これを思い全く長い時間であった。到着予定時間になっても飛行機は暗黒の中を飛んでいる。高度をぐっと下げ Fasten your seat belt はもとより No smoking のサインのついた頃、薄暗いあかりがだだっ広く点々と見えてくる。よみの国に着いたという感じである。節電のためだろうか、空港に夜着いた時のあの目のさめるような素晴らしい夜景はここにはない。空港で型通り免疫、入国管理の窓口を通る。さていよいよ問題の税関である。見渡したところ多くの入国者を恐れさせたことで有名な個室はどこにもない。この国の検査は婦人優先主義で盛んに婦人達が荷物検査を受けている。それが済んでやっと男の番が廻って来たので、荷物を台の上に乗せて旅券を税関吏に渡す。酒を持っているかと聞くから持たないというと、それで OK になりカバンに白墨で印をつけてくれる。確かドルの現金申告があるは

ずだと思いきよきよ窓口を探すと、さっきの税関吏が“*This way please*”と出口を案内してくれる。なんとあっけなく国境を越えてしまったことか。これは私が公用旅券だったためか、最近の風潮なのか実は今もって分らない。あまりにも瞬間的に済んでしまった。ほっとしてあたりを見廻すが外貨交換所も案内所もない。出迎え人と車の客引きの人垣をくぐり抜けて進むが、客引きがくっついて離れない。友達が待っているんだと追払おうとするが、肝心の出迎えの人がいないのでどうしようもない。仕方がないのでインドネシアホテルまで3ドルという約束で車に乗る。20年前の古いフォードの運転手は中国人で、良くべらべらしゃべる。良い加減に相づちをうっていると、ドルをルピアに有利に取り換えてやるという。いらないといったが真暗な道をわけのわからぬ方向に進み、人通りのほとんどないところに車を止め、50ドル取り換えるか100ドル取り換えるかと中国人はわめく。この車はドアが2つで助手も横に乗っていて出口は全部ふさがれている。“インドネシアホテルに行け”を繰り返しながら、警官か誰か頼りになりそうな人が通るのを待つ。大きい荷物をかかえているし現地の事情にもまだうとく、旅行者が襲われて一番弱いのはこの時である。無念にも私の財布にはドルの少額紙幣がない。5ドル取り出して身体のかしゃな助手の方を突きとばすようにして外に出る。彼等は急に態度を変え、身分証明書の如きものを見せ、必ずホテルインドネシアに連れて行くから乗れという。その間に車の番号39829を手帳に写し取る。こんな所でおろされても方向は分らず車は通らない。大きな荷物をかかえ通行人に道をききながら行こうにも、あまり連中は英語が話せそうでもな

いし、ちょっと見渡したところホテルらしい大きな建物もない。仕方がないからまた乗ると今度はホテルのそばまで確かに連れてきてくれたが、またここで5ドル寄越せと2人でわめく。さっき払ったといっても受取らぬという。車番号が分っているのだから、あとで問題にしても良いと思い5ドル払いインドネシアホテルに入る。あとで聞いてみると空港からホテルまでは1ドルか2ドルの距離だから随分ぼられたものだ。

受付で申込みをしようと思い窓口に向かうと横から“日本の方ですか”と尋ねられる。この人が日本工営K.K.の福岡さんで、やっとここで日本工営さんと連絡を取ることができた。きけばガルーダ航空はいつも遅れるし今回も遅れたので一旦会社に帰り、飛行場へ電話したらもう着いたというので空港にかけつけたら大きい日本人が出迎えを探していたが、車でインドネシアホテルに向かったときき、大急ぎで追っかけたという。彼の方がホテルに先についたので本当に間一髪の差だったようである。ホテル・インドネシアは最低料金でさえ15ドルは取られ馬鹿ばかしいからおよしなさいと奨められ、日本工営さんの宿泊所に行く。所長さんはスラバヤに行き不在だったが、もう1人の日本人千田さんも起きてこられ3人で飲む。随分久し振りに日本人に会ったような気がして話がつきず、眠りに入ったのが午前2時頃であった。さっきの話をすると、警察にうったえると10ドル取り返すのに20ドルかかるから、やめておいた方が宜しかろうということである。この国では中国人は上層階級で、普通は親切で信義に厚くこういうことは滅多にないことだそう。私が余程間が抜けて見えたのかも知れない。



写真1 爆発するケルード火山

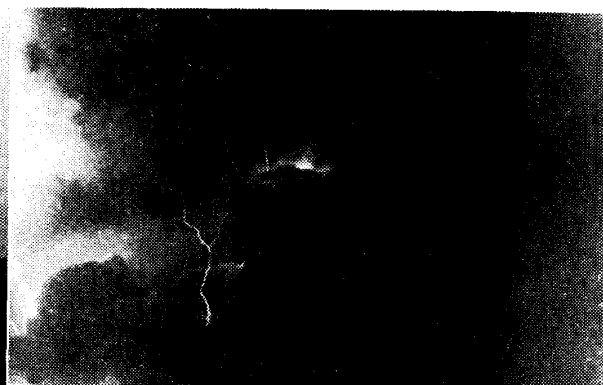


写真2 噴煙の中の放電現象

## 3

14日(晴)眠りについたと思った途端ドアをノックする音で起き上る。7時ジャカルタ発の飛行機でスラバヤに行くべく5時に起こされたのだ。二日酔でもうろうとしたまま空港につく。冷房の設備もない空港に、何の用事があるのか大勢の人が群がっている。例によってガルーダの時間は出鱈目で7時発の予定が9時になる。飛行機は本当に飛び去るまで信用がおけないので最後まで千田さんが見送って下さる。飛行機は軍用輸送機改造のものらしい。パイプの骨組に木綿を張った粗末な椅子である。しかしスチュワーデスはなかなか親切で、日本の国内航空同様飲料や菓子パンのサービスをしてくれる。雲の上に火山が点々と列をなして頭を出している風景は非常に特徴的であるが、飛行機よりの撮影は原則として許されていないらしい。

スラバヤに着いたのは11時30分頃であった。むかえの人はまたいない。昨日ついたばかりなのに、朝早い飛行機に乗ったのも、むこうが全部手配してくれていると思えばこそではないか。あまりといえば無礼などいくら怒ろうにも相手はいない。長距離電話はかからない。電報は1週間かかる。そのうち気持が落ち着いてくると4時間もかかるカランカテスからむかえに来るので途中何か事故でもあって車が遅れているのかも知れないと善意に考え、日本人のむかえが来たら連絡してくれと空港職員に頼んで食堂で昼飯を、出来る限り



写真3 荷物を運ぶ婦人

時間をかけて食べる。いくら待ってもむかえは来ない。あきらめてカランカテスより頂いた手紙の住所を頼りに車を備う。ここで話が前後するが昨日日本工営さんより3,000ルピアの大金を借金して持参しているので気は大きい。現在の相場で日本円に直すと12,000円前後に過ぎないが、この国の高官の月給が1,800ルピア、中堅官吏が500ルピア程度なので、私が気が大きくなったのは無理もなかろう。ジャワ島を縦断して、またそれから山に入っていく長距離コースを500ルピアの約束である。運転手はひげをはやしたインドネシア人で助手はどうもその子供らしい。昨日にこりて運転手に甘い顔はせず、むっつりと腕組みをして渋い顔を続ける。万一のため車の番号をメモし運転手の顔を後から撮影する。荷物を頭の上のせて歩いている女達、お高祖頭布のような回教徒帽をかぶった男達を眺めながら車は良く舗装された道を高速で進む。道路両側の並木に白ペンキを塗って境界杭の代用をさせているばかりでなく電柱のかわりまでさせている。2時間以上経ってマランの町につく。運転手はあっちこっち曲った末、駅前の車のたむろしているところへ車をつける。例によってわっと人だかりができる。何かを中の1人としゃべったと思うと、300ルピア俺に寄越して車を降りろ、あとの200ルピアでこの車がカランカテスまで送るという。荷物を移して車を乗り換える。多勢の人垣に囲まれているので物騒でしようがない。中にはチップチップといって手を出すけしからん奴もある。知らん顔して地図を読んでいるとやっと車が動き出す。ここから道が悪くなり猛烈にゆれる。山の中に入るので不安はますますつのって随分時間がかかったように思われたが約2時間でカランカテスに到達して、ほっとしたのは4時30分過ぎであった。あとで聞いてみると、むかえの人は11時頃まで空港で待たれたが、もうジャカルタよりの本日の飛行機はないといわれて帰って来たとのこと。全く憎らしいのはガルーダ航空である。

さっそく歓迎会を開いて下さり小紫所長以下10名程の日本人が日本製カンビール、サントリーなどで夜のふけるまで、和気あいあいと談笑し、我々が今、インドネシアの山中にいることをすっかり忘れる程であった。しかもここは全く涼しい。海拔700mというが空気は乾いているし、7月14日の日本の暑さなどはみじんも感じられない。



写真4 ケルード火山調査隊一行



写真5 ケルード火山頂上附近

4

15日（晴）今日はケルード火山周囲一帯を調査する計画である。畑所長代理と田中地質技師が同行して下さり一番慎重なインドネシア人に6人乗りのワゴンを運転させる。北上しマランより西に進路を取り、途中温泉調査、放射能測定を行ないつつ昼頃カリ・コントに到着。小紫所長は昨夜のうちにこちらに帰って居られ、4月30日のケルード火山爆発の様子やその後の泥流の発生の様子をつぶさに写真を基に話して下さい。噴煙の中の放射現象など貴重な記録写真を頂く。昼食後社宅で美人の奥様にコーヒーを御馳走になる。こちらに来ると本当に日本女性・中国女性は白人といっても差し支えない位色が白く感じられる。この国でも中国人女性はほとんど現地人と結婚せず、仮に結婚すると中国人の社会からは仲間はずれにされてしまうという。こんなところにも、9・30の暴動の際共産党員とともに中国人が多数殺された遠因があったのであろうか。午後カリコントを出発した直後、交通事故の現場を通る。黒山のような人ばかりで前進は不可能。子供がはねとばされて重傷だそうだが、医療設備のない当地では絶望だろう。被害者の家であろうか、家の内からはいつまでも女の泣き声が続いている。自動小銃を持った軍人がいっぱいうろろしているので不気味だ。アメリカ人が一度事故を起し被害者を助けようとしたら、群集に袋叩きに会ったそうである。日本人がやはり交通事故を起したときは、一目散に逃げて最寄りの警察に届けたそうである。その後始末は随分安い金額で示談にできたという話だ。とも角現地人は非常に安い値段で備えるので、どんな腕自慢達も現地人運転手にまかせているようである。そういう訳で現地人

の中では運転手は金持ち階級に属するので、回教徒の戒律通り4人妻を持っているということである。

タイ国では道路に犬が寝そべって邪魔で仕方がなかったが、この国ではにわとりが道路にうろろして全く邪魔になる。アスファルトをよくついているがアスファルトがうまいのだろうか。たまには水牛なども道路の真中であぐらをかいている。山の中では猿の一行にも出会った。

5

16日（晴）ケルード火山噴火跡の調査に出発。午後になるとケルードは雲に覆われ視界がきかなくなるので昼までに登頂しようということで、眠い目をこすりつつ5時起床、朝飯、5時30分出発。一行は畑所長代理、田中地質技師の他にカリコントから管野土木技師ともう1人の日本人に、ポーターのインドネシア人、それに運転手2人で2台の車に分乗する。一番楽な登り口はカリコントの反対側にあるのでケルードをぐるっと大きく車で廻る。1500m位の高さまで車で行くことができたがそこから上は歩いて行くより仕方がない。途中放射性測定を続けながら登はん。火山灰の被害、泥流の被害をみながら次第次第に頂上に近づく。爆発したばかりの火山の登山は非常に疲れる。火山灰、砂に厚く覆われた道らしくもない道を一步、一步あえぐようにして昇る。9時30分頃頂上まで1kmの地点に達したが、砂斜面の傾斜は急で、そこから下は断崖のようにになっている。ここを横断するのは年寄りにはとても危険である。放射能測定、写真機をたくましい山男達に託してポーターと私とは、弁当とカンピールの番をする。危険な登山なので心配していると12時頃皆元気に帰ってくる。昼食後車を待たせた所まで

戻ると運転手達がハリマオの足跡があると騒いでいた。

カリコントに立ち寄りビールを頂き小紫所長御夫妻、管野氏他の皆様に別れを告げ、畑、田中氏とカラシカテスにむかう。途中マランで夕飯どきになり、中華料理屋による。ここは人口30万位のマラン市最高の店とはいえ個室風の部屋4～5、食卓5位おいた大部屋からなっている木造ペンキ塗りの祖末な店で、繁栄を続ける日本から来た我々にはあまりにもみすばらしく感ぜられる。蛙の足、鳩など珍しいものから、豊富なカニ、エビの美味しい料理がふんだんにでる。残留したカラシカテスの日本人の人達が、丁度隣の個室に食事をしに來ていたのでビール、サントリーを交換して再び歓迎会気分を味わう。靴みがき、ギター引きが入れかわり立ちかわりやってくる。インドネシア人のギターに合わせて歌う哀調を帯びたテノールをききながら、靴を磨かせ、ビールの杯を傾け大いに大名気分を味わう。しかしここは回教国のせいか料理運び、ギター弾き、靴磨きなんでも男である。参考のためにしるすと靴磨き5ルピア、歌うたいは10ルピア程度である。こんな僅かの収入で良く生きていけるかと思うが、現地人の食事は米飯をカレーでまぶしたものとか、日本のせんべいの醤油のつかないみたいなものであり、バナナなどはふんだんにあるので生きていくのには低収入でもことかかないらしい。この国で生産されているものでもビールは一応飲めるが、ウイスキーはくさくてとても飲めたものではないという話である。

## 6

17日（晴）朝10時我々がバリ島で使うための車が西方氏を乗せて出発する。彼等は今晚バリ島対岸のブンジュワングに泊り、早朝のフェリーに乗ってギリマヌクに渡り海岸べりを通して我々の飛行機の到着前にデンパサールの空港についでくれるはずである。長距離の旅のつつがなきことを祈る。私と畑所長代理はずっと遅れて午後3時出発し5時30分スラバヤの日本工営宿舍に到着。久保田所長に御目にかかる。夕飯に早いのでサントリーをちびちびやりながら時間を待ち、8時頃町の中へ中華料理を食べに行く。町はやはり暗いがこの店は冷房装置がついているので久しぶりに文化的気分を味わう。冷蔵庫もあるので、持参のサントリー

でハイボールを作って歓談する。それから車を駆って市民公園に行く。ここは市民娯楽街というところであろうか。僅かな入場料を払うと中には芝居小屋、映画館、土産物屋、演芸館などがある。そこに入るときにはまた入場料がいる。岡本綺堂の銭形平次に出てくる江戸時代の茶店のような感じのものが沢山あり、そこには若い女性がいて明るい電灯の下でサービスしてくれる。町の暗いのにくらべ、市民公園全体が比較的明るいのでいかにも健全な感じを受ける。あちこち、うろちょろして可愛らしそうな女性のいるところに入る。インドネシア語と英語とチャンポンにを使って彼女と喋りながら、例によって靴を少年に磨かせながら、ビールを飲む。

風も涼しく乾いていて全く良い気分になる。案内の方々も段々ハッスルして来てこれからバーに行こうということになる。バーというのは国が新設を認めないとかでスラバヤにもほとんどなくなったということである。我々の行った所は日本の場末のバーのような感じで白人と中国人がカウンターで一組飲んでいて。一応電蓄もあって、良く聞くアメリカのジャズをかけている。この女性は中国人その他の混血ばかりで全くたくましそうである。盛んに日本人の誰れさんを知っているかを連発する。旅の恥はかき捨てと一夜を共にした人達の名前であろう。彼女達はホテルはおろかどこへでも御供をしてくれるし、ドアの蔭には急ぎの場合のベッドもあるということである。我々は紳士である間に急ぎここを退去することにする。

## 7

18日 9時25分スラバヤ空港発10時35分デンパサール空港着予定のガルーダ746便がまた例によって遅れてくる。しかし今日は珍らしく1時間の遅れでデンパサールには11時30分頃着き先行した西方氏と再会した。この飛行機は本当の旅客機で機内でサービスしてくれた。もち米の中に肉の入った菓子、チマキのようにバナナの葉に包んだゼリーは最高に美味であった。

さっそく車にのり30分程でデンパサールの町の中心にあるバリホテルに達する。ホテルはそんなに混んでおらず予約なしでOKである。一階建ではあるがなかなかしょうやかな建物である。各個室は網でかごのようにかこまれたベッドルームの他にもう一部屋とバスが付き外にはロビーまであって机と椅子とソファがつ

らている。これでドルに換算すると1～2ドルの料金なのだから大変安い。但しホットのボタンを押しても湯は出ない。水ばかりである。各人が個室を占領して昼寝する。夜はデンパサーから50km程離れた部落へガイドを傭ってケチャックを見に行く。この芝居には我々の憎しみのまとであるガルダも登場し神鳥ぶりを発揮しラマを助けて大活躍する。

8

19日(晴)8時にバリホテルを出発し、図1のごとき経路で自然放射能の測定を行ないながら進む。バトール火山の近所に温泉のあることも分ったが、道が悪く徒歩でしか行けない。往復2時間はかかりそうなのであきらめる。バリの山の中は涼しく快適で測定は順調にはかどる。昼近くキンタマニーを通過。ここは市場でもあろうか、人が大勢むれている。この前来た日本人は何となく危険を感じてここで引き返したという。それではこれから先の道は9・30事件以後日本人にとって処女地かも知れない。張り切って先を急ぐが2,000m級の高台から海岸まで一気におりるので道は蛇のようにうねってなかなか北海岸に達しない。気温はどんどん上ってくる。

昼飯のためシンガラジャで中華料理屋を探す。物凄く汚い店ではえが多く、日本では料理店とはお世辞にもいえないであろうが、ここでは最高の店である。汚い店ほど中華料理は旨いというけれど、確かに味は素晴らしい。昨年9・30事件の際ジャワ島から逃げ込んだ共産党員がバリ島で何万と虐殺され(一説には8万といわれる)、特にこのあたりがひどかったといわれるだけに通りすがりの人間が我々をのぞき込むとあまり良い気持はしない。小遣いを渡された運転手がどこかの屋台で昼食を済ませて帰って来たのでさっそく出発する。途中木につながれた馬が道路の反対側に移動したので綱が通せんぼをしたようなかっこうになっている。運転手はおかまいなしにつっ走るので綱はきれ、馬は放たれてしまった。飼い主が気がついてダンピラでも持っておっかけて来そうな気がして、車を降りて放射能の測定をするたびにはらはら道路の背後を振り返る。後進国のしかもこんな田舎でも道はそんなに悪くない。オランダ統治時代の遺物であろうか1km置きに道標があるので視測には至極都合良い。午後4時

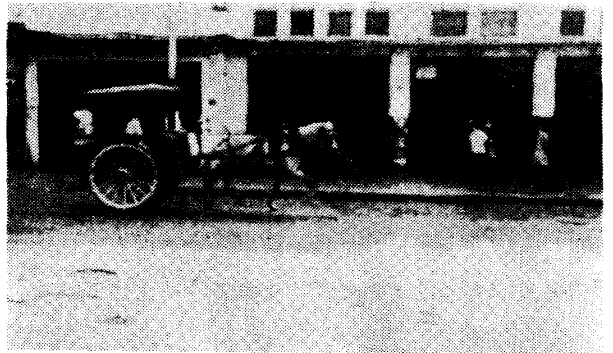


写真6 デンパサーの町を走る馬車

頃ルクルクにつきデンパサーまで10kmの地点に達する。ここからまた温泉探しに西北の方向に進路を逆に取り。この国では温泉のことをアイルパナス(Aires Panas)という。Airesは水、Panasは温かいという意味である。これが普通名詞ではなく固有名詞として使われる。ケルードのふもとの温泉もアイルパナスであるし、ここもアイルパナスである。大体温泉は町の中心にはないし、しかもこちらでは温泉は日本のように珍重されないのを探すのに骨が折れる。

この温泉は管から温湯が出て、その下に人間が行ってお湯をあびるというあっさりしたものである。ケルードのふもとは一応バンガローの如きホテルもあり、中をいくつにもしきって家族風呂風になっている別棟ももっていた。

ホテルに帰り一風呂あびてからデンパサーの夜の探訪をする。馬車に乗って暗い町の中を回遊する。馬車の客室は狭いののに3人乗って窮屈なばかりでなく、私の重味で客室が後に傾き馬の下半身が浮くような形になり、苦しそうであるので一時間の約束ではあったが30分程で降りる。どことも同じ様にホテルの廻りにはポン引きが多い。

9

20日(晴)一路南下しサヌールの海岸に行き印度洋を眺める。ここに大成建設がやはり賠償工事で立派なホテルを建設中でほとんどでき上っている。工事現場の中に入って見学するが、インドネシア人達はのんびりとさぼっているように見える。日本人のように勤勉にやったら、熱帯性気候や栄養の少ない食物では身体がもたないのかも知れない。カランカテスの工事現場でも7時から午後2時迄の勤務だそうだが現地人は何

のかの理由をつけては良く休むそうである。娯楽の設備も何もないのに休んで何をやるのだろうか。それに引き換え日本人は勤勉で午後2時に終わるからの時間をもてあまし、遂に9ホールの立派なゴルフ場を作り猛練習をしているという話である。私の聞いた範囲ではジャカルタ、ボゴールにも立派なゴルフ場があり、入会金、キャディ料など日本の値段にするとべら棒に安いので日本人には大いに楽しまれているようである。

## 10

21日(晴)デンパサー空港を12時30分に発ち16時30分ジャカルタ空港へ着く予定。同行下さった畑、西方面氏は西海岸ギリマヌク発の最後のフェリーボートに乗って車とともにジャワ島に渡る積りなので11時30分にガラシとしたデンパサー空港で別れる。またここで一人旅となるが例によってガルダ685便はやって来ない。インドネシアの空港にはお客へのサービス精神は全くない。飛行機が定刻にやって来なくても何の挨拶もない。冷房の設備もない、日本の小さい駅前のバス発着待合室みたいな建物の中でぼやっと待つだけである。それでも2時30分頃飛行機は出発し3時40分スラバヤに着陸、昼食券を渡され食堂で焼き飯を食う。それからまてどもまてども飛行機は出ない。6時30分頃になってこの飛行機はこれでおしまいだ、明日6時30分出発するから5時30分にここにもう一度こいという。SorryともPardonともいわず、全く高姿勢である。こういう時のJALの平身低頭型と好対照である。ジャカルタではこの前にこりて空港で福岡さんが4時間も待っていて下さったそうである。申し訳のないことをした。今度はスラバヤの宿舎を知っているのを車を拾おうとするとスラバヤから乗る積りだった中国人がブンガワンまでついでに送ってやるという。中国人はなかなか経済的に羽振りが良い。しかしまたドルを取り換えようなんてやられるので断ってタクシーにのる。バリでは車を持参したので無用であったが、デンパサーにはNiturとマークした信頼のおけるタクシーがあった。ジャカルタ、スラバヤにはこれがないので車の運転手と値段の駆け引きをする必要がある。普通100ルピア程度のところをこの時は160ルピアとふっかけられてしまった。突然の訪問にもかかわらず久保田所長は嫌な顔ひとつせず、手製のかつ井を振舞って下さる。久しぶりに故郷の味を噛みしめ日本製のブド

ウ酒で夜のふけるまで歓談する。ガルダさんはあてにならないのでジャカルタに行く他の方法を色々考えたが、道程は1,000km位あるので車は無理だし、汽車はまた汚くて混んで熱くて、とても日本人ののれる代物ではなく盗難が多くて便所にもいけないという話で結局飛ぶまで待とうということになる。

## 11

22日 久保田所長は私が乗り遅れぬよう、朝4時に起きて朝食を作って下さる。異国の地で日本人の親切は身にしみて嬉しい。

昨晩も勤務時間後に私がついたので、運転手に朝早く来て私を空港に送れという命令を伝えるため夜遅く徒歩で出かけられたようだ。私もガルダ時間に馴れてしまったので6時過ぎ空港に行く。万一のため自動車は飛行機のでるまで待機して下さる。しかし今日は珍しく定刻に飛行機が出る。ここは空軍と共用なので市民の待合室から飛行機までちょっとした距離をバスで行く。将軍が特別仕立の小型機でどこかへ行くのでその乗用車が飛行機につく間、我々のバスは飛行場の片隅で待機させられ、出発したのは6時55分、ジャカルタには9時につく。2日も一緒にいると乗客同志親しみが湧いてくる。東条英機に良く似たヘラルドトリビューンの特派員、乳飲み子を始め子供数人のかかえたジャワサラサを巻いた骨と皮ばかりの小母さんなど、今でも顔がありありと浮んでくる。

空港を出ると、例のポン引きたちが鴨が来たと思ってついて離れない。今日で2度目ともなれば連中のその手は食わない。デンパサーのようにNiturというマークのついた信用のあるハイヤーがいれば良いのにジャカルタにはそれが無い。仕方がないので国際空港の2階の食堂に入っていく。お茶一杯で20ルピア位で我々にはこたえないがここに入れるような金持は少ないうえお客は誰もいない。ポン引氏は離れずついてくる。電話で日本工営ジャカルタ事務所に連絡し、むかえを頼む。電話のそばまで離れなかったポン引氏も日本語で連絡のついたらしいことが分りあきらめて出ていった。事務所で昼食を頂いた後千田氏とバンドンにむけ出発する。吉田所長の御好意で日本工営さんの車を先方に提供し、そのかわり日綿実業さんの高級車を運転手ごと借りて頂いた。福岡氏は我々がバンドンに行っている間に航空券の変更手続きをやって下さる

ことになる。ジャカルタからボゴールを通りバンドンまで時速 100 km の高速で突走る。なかなか運転技術は旨い様子だ。大体インドネシア人は器用といわれているが、土地感は鈍い。翌日の旅行でもバリの旅行でも我々は運転手の後から目を皿のようにして道路標識や建物をみて右とか左とか真直ぐとか怒鳴る必要がある。しかし今日は一本道で間違えることはない、ゆっくりと四方山の素晴らしい景色を眺めながら進む。東部ジャワ、バリのように荷物を頭にのっけ、サラサを腰に巻きつけた情景はこちらにはない。一応人々は欧米風のスタイルで、近代的な喫茶店などが峠の見晴らしの良いところに立っている。道路の途中に時々剣付き鉄砲の兵隊が立って居りストップさせられる。紙切れと粗末な旗を寄越して寄付をさせられる。金額は35ルピア位だが何カ所も色々違う寄付があるのでかなわない。今日は土曜、日曜ではないので少ないとのことであるが、それでもバンドンに着くまでに3回やられた。その他兵隊達が車がないので自動車を止めてヒッチハイクをやるのが横行している。全く 1 km おき位に兵隊達が車をとめたような顔をして立っていたが、我々の車があり立派すぎて気遅れしたのか、前の硝子につけた日の丸のせいか一度もやられず無事通過した。途中の休憩も含め5時間位で高原都市バンドン市で一番立派といわれるホフマンホテルに達する。1人部屋はないので2人部屋にとまる。我々がフロントから離れると受付係の1人が階段のところまでやって来てドルを公定よりも高く取り換えてやるという。俺達はルピアを持っているから結構という、日本から何か持ってきたか。買えるものはないかという。何もないと断ったら帰って行った。何か取り換えてやったら個室を世話してくれたのかも知れない。現在1ドル大体100ルピアが相場であるが、公定は確か30ルピア位で外国旅行者には80ルピアで取り換えてくれるという話もあるので、それ程無茶苦茶ではなくなったようである。このホテルは建物は立派だが例によって湯が出ない。冷房はないがここは高原都市で涼しくその必要はない。

テレビはないがラジオがついている。が英語放送は聞えなかった。ホテルの一品料理ではつまらないのでホテル裏の中華料理屋で持参のサントリーをハイボールにして飲む。靴磨き、ギター弾き、煙草売りが入れ替り立ち替りやってくる。女子学生が身分証明書の如きものを見せて寄付を集めにくる。

食事を済ませ外に出るともう10時で店はしまっているが街はジャカルタ、スラバヤにくらべずっと明るく商店のショーウィンドーの中も商品が豊富に見受けられた。ホフマンホテルの外側にも輪タクが沢山並んでおり、例の如く我々に誘いをかけるがあまりしつこくはない。

## 12

23日 バンドン工科大学と地質調査所に午前中に行く。この国は早朝勤務であるので8時から車で駆けずり廻る。工科大学の校庭の中では男子も女子もそれぞれ作業服をつけて軍人に軍事教練を受けている。

大学の入口は女の兵隊が立っている。写真を取らせてくれという一応ポーズをとってくれた。地球物理の Zen さんは研究室にいない。事務室の男の子に案内を頼むと喜んで車の助手席にのって案内してくれる。講義館、官舎、実家と廻るがどこにもいない。大学の官舎や実家はなかなか立派でハイカラである。残念ながら私の住居や昔住んだ官舎よりずっと立派である。とうとうあきらめて地質調査所にむかう。お目当のハックスルヨーさんは留守で次席のムルジョトさん、エチオピアから留学のバルボさんと火山、温泉、地すべりについて話し合う。写真1枚、紙1枚も不自由な様子で気の毒である。話の中で結論的なことになる主任のハックスルヨーさんに聞いてくれとか、他の部門とも関連があるので相談して返事をする



写真7 女の兵隊

から、質問は文書にして出してくれという。研究の自由とはほど遠そうな感じを受ける。

バンドンの南1時間位のところにタングバンフラー山の火口がある。またそのそばに温泉がある。こちらへの道は何か軍事上の要地があるのか、それとも共産党員のバンドンへの出入を押えるためか寄付強制ではない本当の検問所が2カ所程あった。勿論日本人ということであさり通してくれたが、有難うというと彼等も黒い顔をほころばせる。対日感情は随分良さそうだ。

この山は今迄の測定で最高の自然放射能を示している。おかしいと思ったが、温泉も放射能が高い。カラカテスの宿舎を出てから湯につかったことはない。温泉にざんぷりとつかり汗を流したい欲望にかられたが、何分時間がない。無念の涙を飲んで引き返す。行きと逆のコースを取るがボゴールあたりで叩きつけるようなしゅう雨に会う。あたりは既に暗く車幅灯もつけず、ライトも半分しかないような車がすさまじい勢いで通り過ぎる。往年の帝国海軍軍人の眼のようにくらやみの中でもこの運転手はよくみえるのかも知れない。ジャカルタに近づきバイパスを通ると近いのだそうだが運転手は大廻りをする。バイパスではこの前兵隊同志の撃ち合いがあり数人死者が出たということ。危険な道であるらしい。

予定より1時間以上も遅れたので吉田所長始め皆心配しておられた。日本航空の人ともみえていた。明日からの航空券を持ってきて下さったのだが、これもまたやり直しになるのかもしれないと心配して帰れずにいたとのこと。お待ちかねなので水浴もせず、そのまま福岡夫人づくしの日本料理とスコッチウイスキーで送別会をして頂く。これがインドネシア最後の夜かと思うと全く名残はつきず、楽しかったこと、つらかったことをしゃべり飲んでいるうちすっかり酔ってしまい、いつベッドに入ったのか終りは全く記憶にない。

## 13

24日 福岡氏に送られ日本航空にのる。気分は決して悪くはないが、昨日の酔がまだ全然さめない。スコッチは随分強いらしい。シンガポール、バンコックを過ぎ午後5時頃香港につく。この頃になり、やっと意識がまともになる。ジャカルタ空港で荷物を預けた覚えも受け付けで例の国境を越える手続きをした記憶もまるでない。荷物は無事着いているところをみると出国

のときも税関は簡単にOKしたに相違ないし、出国のときの外貨の申告も、ルピア持出しに関する検査も何もなかったに相違ない。国境の出入はずい分楽になったと思われる。ただガルダの中では何も買えない。入国のときに無税のウイスキーと煙草を買ってお土産にしようとしてあてがはずれ、私自身がアメリカ煙草を40〜50ルピア出して闇で買わざるを得なかった。飛行機に乗る前に買われることをお奨めする。

## 14

とりとめもなく旅日記を綴ってみたがその他に書き足した方が良いかも知れぬと思うことを述べてみよう。先ず第一はマラリアの問題で、これはジャワ島中部に限定されているという話ではあるが、蚊がどこでも非常に多いので気持が悪い。特にバリ島では多かったように思う。タオルを取ると、その下から5、6匹ぶーんと飛び出してくる位である。最近良い特効薬があるというので私も飲んでおいたが蚊取線香は必需品である。

滞在が長くなるとどうしても理髪の問題が起ってくる。理髪店の前の円形階段型のしるしは万国共通かと思っていたがこの国ではなかったようだ。私の行ったところはマスクをしてやってくれ、そんなにくさくはなかったが、水道がないので、ボウフラのたまった水槽のへりをとんとんとたたいて、ボウフラが下に沈んだところで水をすくって石けんを溶かしひげをそってくれた。もちろん髪洗いはせずヘヤーカットとひげそりで10ルピアであった。娯楽のないせいか映画館の前はいつでも黒山の人だかりで、入口を狭くあけてそこから少し宛中にいれている。日本ものもわりときているが、日本語は現地語にふき換えられているという話である。中に入るとシラミ、ノミなどがうつるらしい。ホテル・インドネシアでは時々紳士淑女用の映画会を開いている。値段は100ルピア級なので値段からいっても庶民は入って来られないうえに、ネクタイ、上衣着用であるので背広を持っていない人は入れない。

治安の方は私がカラカテスに泊った夜、工事現場に強盗が入り、現地人の守衛が重傷を負ったことも日常茶飯事的に語られている位で、決して良いとはいえない。現在は兵隊になりさえすれば何とか食べていける道があるのでまだよいが、マレーシアとの平和条約ができて軍縮にでもなった後に予想される武器をもった失業者の大群に恐れをいだいている人が多かった。